

## 馬琴読本『開卷驚奇俠客伝』論(二)

——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——

### 三 宅 宏 幸

はじめに

天保三(一八三二)年から同六年にかけて刊行された曲亭馬琴著『開卷驚奇俠客伝』<sup>①</sup>の世界や構想については、従来、中国白話小説『女仙外史』や『好迷伝』、新井白石『読史余論』との関連が中心であった。<sup>②</sup>だが、拙稿「馬琴読本『開卷驚奇俠客伝』論——『封神演義』『通俗武王軍談』との関連を中心に——」(『日本文学』第59巻第2号、二〇一〇年二月。以下、前稿とする。)において、暴悪な紂王が率いる殷王朝を、「仁徳」を大義とする姫昌(文王)・姫発(武王)率いる周王朝が討伐する、殷周革命に取材した中国白話小説『封神演義』と通俗軍談『通俗武王軍談』(清地以立著、宝永二(二七〇五)年刊)が、『俠客伝』に影響を与えることを指摘した。しかし、『俠客伝』と殷周説話との関連はさらに存する。

馬琴読本『開卷驚奇俠客伝』論(二)

I、達小六が信夫を救う蘇生譚と、『封神演義』の黄天化が実父黄飛虎を救う蘇生譚。

II、楠姑摩姫が監視されるに至る過程と、姫昌が芟里城に監禁されるに至る過程。

本稿では、右二場面の殷周説話との関連を確定し、『俠客伝』と殷周説話との結び付きが強固であることを示す。その上で、馬琴が『俠客伝』に多く描いたと述懐する「真面目」にも言及する。

#### 一 達小六と黄天化——第二集巻之四——

本節でとりあげる箇所は、前稿で『封神演義』との関連を指摘した、館信夫が自ら投身する場面の直後にあたる。

第二集巻之四、脇屋義隆の家臣館英直の娘信夫は、七歳のときに誘拐されるが、稲城守延に救われる。信夫が十八歳になった頃、

国司の権臣木造内匠親政の息子木工介泰勝は、信夫を側室にと所望するも、守延は拒否。怒った泰勝は若党らに命じて守延を暗殺させ、信夫を別荘の楼に軟禁する。小六と楯取庶吉は偶然若党と下僕の会話を聞き、信夫を攫った犯人が泰勝である証拠を掴む。小六は伊勢の国司北畠満泰に訴え、信夫を救出するため泰勝の別荘に向かう。だが、小六が別荘に着いたとき、既に信夫は投身していた。

小六は蒲団を推ひらかして、(信夫を一稿者補) 相れば寔に呼吸絶たる、死顔ながら色も変らず。迭に七才なりし秋、相別れしより年闌ても、有繫に残る幼少良の、ム歟とばかり思ふのみ、画餅になりたる再会の、甲斐もなげきを推隠す、……

「信夫は這里より落し折、窮所を撲して死たりとも、那身に受たる傷は見えず。倘良薬を用ひなば、息吹返す事もあるべし。俺幸ひに腰に附たる、薬籠に奇薬あり。清浄水に火を鑽掛て、快もて来よ」と吩咐れば、若党一名こゝろを得て、一個の奴隸共侶に、遽しく下立て、時を移さず件の水を、茶碗に汲とり、折敷に載て、恭しくもて来にけり。小六はこれを傍に措いて、信夫が胸を拊試するに、聊温なりければ、廳で一粒の仙丹を、拿出して水と共に、信夫が口に沃き入れ、仙嬢を黙禱して、姑且胸を拊る程に、信夫は忽地「吐嗟」と叫びて、眼を開き身を起す、蘇生に大家うち驚きて「奇也

々々」と称へたる……国司の使者は美の親の、守傅きし脇屋の公達、小六丸ぞ、とまだ知ねども、孝義に厚き烈女の誠心、  
…… (第十七回)

以下の六点が、この場面の展開・特徴としてあげられる。

- ① 小六は息絶えた信夫を見つける。
- ② 小六は、妹との再会が「画餅」になったことを悲しむ。
- ③ 側にいた人に、水を持つてくるよう命じる。
- ④ 仙女に貰った仙丹を、水と一緒に信夫に飲ませる。
- ⑤ 信夫は一声叫んで、目を覚ます。
- ⑥ 幼い頃生き別れた義兄妹が、再会する。

信夫が仙丹で蘇る展開について、崔香蘭『開卷驚奇俠客伝』における『女仙外史』『水滸伝』などの趣向(『馬琴読本と中国古典小説』、溪水社、二〇〇五年一月)は、次のように述べる。

小六が自害を図り、半死半生の信夫を仙丹で蘇生させる趣向は、『女仙外史』第十回……での賽児が仙丹三粒を老子より受け取り、その中の一粒は自分が服し、あとの二粒はそれぞれ二人の女子を病気の危篤より救命するという趣向より想を得ている。そこで『女仙外史』の通俗本『通俗大明女仙伝』<sup>③</sup>を確認すると、仙丹の二粒目が卷四「月君青州遇寒黃」において使用される。

百日ガ内晝夜啼テ止ズ。四歳ニ至、迨言ザリシ故。啞ニヤ有

ケント愁シニ。……鮑姑。玄霜一粒ヲ月君ニ通。雲英妹申ク。  
玄霜ヲ服スルハ。上池ノ水ヲ用ユ。次ハ武彝ノ茶ヲ佳ナリトス。

月君曰。武彝茶幸コ、ニアリト。即玄霜一粒ヲ茶ニ調和。

巧姑ヲ呼デ東ニ向。八拜セシメテ之ヲ咽セ。(巻四)

三粒目は、巻四「月君變」容「降馬猴」で使われる。

月君ハ驚ニ乗テ。靜ニ空中ヨリ寶雁ガ家ニ降。内ニ入ッテ

女兒ヲ見玉フニ。昏々トシテ顛ニ似テ顛ニアラズ。醉ニ

似テ醉ニアラズ。月君曰。汝ガ女兒骨髄已ニ枯タリトイヘドモ。

我玄霜仙丹一粒アレバ。之ヲ用テ命ヲ救ベシ。(巻四)

聾啞の女性と骨髄が枯れた女性を、月君が仙丹で救う様を描く。

さて、確かに、一粒を自分が服し、残り二粒で他人を助ける粗筋

は『女仙外史』と共通しよう。だが、二つ問題がある。一つは、両

者の仙丹を飲ませる際の描写が一致しない。例えば、『女仙外史』

では月君のそばに鮑姑がいるが、『俠客伝』の小六は一人である。

また、『俠客伝』では「水」を用いるが、『女仙外史』では「武彝

茶」で仙丹をとくなど差異が存在する。二つめが、仙丹を死んだ人

物に用いていないことである。崔論文は信夫を「半死半生」とする

が、『俠客伝』原文には、「呼吸絶たる、死顔ながら色も変らず」、

「窮所を撲して死たり」とあり、信夫は死んでいる。ところが、『女

仙外史』の女性は、「啞」あるいは「骨髄已ニ枯」た状態である。

仙丹の効用が〈治療〉と〈蘇生〉とで異なること、場面描写が共通しないことを見ると、『女仙外史』だけを典拠としてよいか。

『封神演義』第三十二回「黄天化潼關會父」を見る。賈氏と黄妃

の死により、黄飛虎は一族を連れて殷を去り、姫昌の治める周に向

かう。しかし、追手がかり、殷の將軍陳桐の攻撃で飛虎は命を落

としてしまう。そのとき飛虎の息子、黄天化が現れる。

① 黄天化看見。② 點亡暗暗嘆曰父親你名在何方。利在何處。身居王

位。一品當朝。爲甚來由。這等狼狽。……天化命澗下取水來不

一時水到。天化花籃中。取出仙藥。用水研開。把劍擡開上下牙

關。灌入口内。……有一個時辰。只見黃飛虎大叫一聲。疼殺吾

也。睜開雙目。……飛虎……拜謝曰。飛虎何幸。今得道長。憐

憫垂救回生。黄天化垂淚。跪在地上曰。父親吾非別人。是你三

歲在後花園。不見的黄天化。飛虎與衆人聽罷驚訝曰。原來是天

化孩兒。前來救我不覺又是十有三年。(第三十二回)

以下の六点が、この場面の特徴である。

① 黄天化は死んだ父を見つける。

② 天化は、実の父親が死んでしまったことを嘆く。

③ 天化は水を持ってくるように頼む。

④ 水で「仙薬」を溶き、飛虎の口に注ぎ入れる。

⑤ 少しすると飛虎は、一声叫んで息を吹き返す。

⑥「十有三年」ぶりに、父子が再会する。

仙丹を飲んで蘇る人物の性別は異なるが、(縁者の死)↓(水の要求)↓(仙丹を飲ませる)↓(一声叫んで蘇生)↓(縁者の再会)といった展開が、『俠客伝』と『封神演義』とで一致している。

加えて、両者の人間関係の構図も類似する。飛虎と天化は実の親子だが、飛虎は天化であることに気づかず、「莫非冥中相會如何有此仙意」(なぜここに仙童がいるのだ)と尋ね、天化は「是你三歳在後花園。不見的黄天化」(三歳のときに姿を消した天化です)と告げる。しかし元々、天化も幼少期に仙山に入ったため、父親が誰かを知らなかった。師の道德真君に、「弟子父親是誰」(私の父親とは誰ですか)(第三十一回)と尋ねる場面がある。

この様相が、『俠客伝』と対応する。『俠客伝』原文に、「国司の使者は実の親の、守傅もりつづきし脇屋わきやの公達きんたち、小六こくまる丸まるぞ、とまだ知ちねども」とあり、信夫は国司の使者が小六であることに気づかない。だが、小六は信夫が義理の妹であることを知っている。それは事前に小六が、稲城守延の妻で信夫の養母である老樹おいきから、信夫の生い立ちを聞いていたためであった(第十六回)。

仙丹で死人を救う場面描写の一致、人間関係の構図の類似から、『俠客伝』と『封神演義』との関連を認めうる。

そして『俠客伝』と『封神演義』との関連を確定したことで、

『封神演義』第三十二回の詩、「潼關父子相逢日。盡是岐周美棟梁」(潼關にて父子が逢う日、周は優秀な棟梁を得る)に表現される、飛虎が周の戦力になるという『封神演義』の構成も『俠客伝』の統編構想と関わるのがわかる。信夫は小六に助けられた後、小六の勧めに従って、老樹・庶吉しよきとともに著演の元に行くことになる。小六と別れる場面には、「老樹・信夫・庶吉しよき們、并なむに英虞あつす將曹せうの事こと、この下しもに話説ものがたりなし」(第二十四回)と、今後登場しないかのごとく記される。だが第三集に入ると、垣衣かきぬという女性が登場し、姑摩こま姫ひめに任せ、針を投げて敵の目を潰す術を学ぶ。蒜園あじの執筆の第五集で、垣衣かきぬが実は信夫であることが明かされるが、蒜園が垣衣かきぬ＝信夫とした理由は、「垣衣かきぬの信夫しよぶなる事は、その名の垣衣かきぬ、即すなはてしのぶ草くさなるにて、看官なんひとも大略おほまかたは猜あやせしなるべし」(第五集卷之五附言)の文言に集約される。このことは小津桂窓おつづけいそうが『八丈伝九輯再評・俠客伝四輯評』<sup>⑤</sup>に、信夫から垣衣への変名は『和名抄』を「よりどころ」としたためと評したところ、馬琴は「垣衣の事御推察に少しもちがひなし。尤感心仕候」と認める。よって、垣衣には信夫でいた頃の「烈女」の性格が賦与され、飛針の術で敵と戦う人物として設定されるわけである。すなわち、後に戦力となる人物を仙丹で救う『封神演義』の構成を摂取し、『俠客伝』でも信夫を仙丹で救い、「垣衣」という女傑を登場させる構想を描出した、と考えられる。

かくのごとく、馬琴は、信夫の投身から小六が信夫を仙丹で蘇生するくだりを、『封神演義』第三十回と第三十二回の趣向とを繋ぎ合わせて創出した。その趣向は、統編構想の伏線にもなっている。

## 二 楠姑摩姫と姫昌

### ——第三集卷之二から卷之四——

姑摩姫にも、殷周説話の姫昌を思わせる形象が看取できる。

姑摩姫は占術を使う。『俠客伝』第三十六回、強盗が姑摩姫の莊院を襲い、錦の御旗、菊水の御旗及び南帝の勅書が入った箱を木綿張荷二郎に盗まれる。箱の紛失に気づいた垣衣と畷倉復市安次は慌てるが、姑摩姫は「星眼を閉、麒麟を凝らして、袖の内にてトふこと、速すみかにして」、箱が近い将来無事に返つてくると述べる。

同様に、姫昌も占いを得意とする。紂王が姫昌の占いを試すため朝廷のことを占わせると、姫昌は「袖ソウの裏ウラにて一課クワし」た後、宗廟に火災が起ると述べる（『通俗武王軍談』卷之一）。姑摩姫と姫昌がともに占いを得意とし、「袖」の中で占う様子が共通する。

また、『俠客伝』第三十二回、姑摩姫の莊院を強盗が襲い、莊院が半壊するが、周辺住民が館を修理してくれる。そのとき姑摩姫は、「村人むらびとら們に飯を啖はまし、酒さけさへ喫のみに儘まかせ」る。村人は姑摩姫に「飲よまびを演のべ」て「徳とくを称たへ」る（第三十三回）。

この様相が、『通俗武王軍談』卷之二と類似する。姫昌は靈台が完成した際、「麋鹿、鴻鴈等の魚鱉、鳥獸を放しめて、大に群臣を臺上たいじょうに宴うし、土木工事に従事してくれた百姓に「金錢せきんを出して百姓を賞しょう」す。百姓達は、皆「懽喜くわんぎ」した。

右に見たように、姑摩姫と姫昌の形象にはいくつかの共通点が見え、人物像を重ねた形跡が窺えるのであるが、確実とはいえない。そこで、姑摩姫が叔父の楠正直に監視される場面に注目する。この場面が、姫昌を葵里城に監禁する殷周説話の展開に拠る。

『俠客伝』第二十五回、姑摩姫は足利義持の暗殺を図るも一休法師に捕まる。義持は姑摩姫を処刑しようとするが、一休法師は中国の故事をあげながら、姑摩姫を許し故郷に帰すよう義持を諭す。

大徳寺の沙弥一休は、姑摩姫の刑戮の、評議に就て……五戒の内うちの中に、殺生を第一義とす。……左も右も、寛仁の御沙汰ごさたあらば、当家の御武運長久ならん。（第二十五回）

だが、佞臣畠山満家は、姑摩姫を囚にした残党狩りを献策する。この策略により、姑摩姫を育てた隅屋惟盈がおびき出され、命を落とす。第二十六回、残党狩りを終え、義持は姑摩姫を赦免して帰すとす。しかしまたしても、満家が義持に対し奸計を進言する。

管領畠山尾張守満家は……今番の重罪、赦されがたきものならんを、又格別なる御仁政にて、赦免の御沙汰候を、恐れな

がら猜うしまつるに、嚮むかに南帝なんていと御誓約ごせやくの、まに／＼ならぬよしもあれば、那方かのたさまの憤いりを、洩よして世を長閑ながひらやかに、治おさんとての賢慮けんりょならん。倘もしその義ぎに候はゞ、愚計ぐけいなきにも候はず、といふに義持よじもちうち微笑ほろえみて……一休いっしゅうの云云うんうんと、論ろんじ稟まうせしよしもあれば、恩免おんめんの沙汰さたに及びおよびにき。なれども寔まことの狂病きやうびやうならずば、<sup>③</sup>虎こを放ちて山へ還す、後患こうわんなしとすべからず。その計略けいりやくは甚いかなる事ぞ、と問とれて満家みつじや……密証みつじやうをもて那かの少女せうにょの、<sup>④</sup>隠秘いんひ眼目がんめくになされなば、万事ばんじ便宜べんいに候はん……惜々ひそか地に姑摩姫こまひめの動静どうじやうを覗のぞひ、他ほかが異謀いぼうあるを知らば、遊佐河内守あそわかつし就盛すけもりと謀あはし合あして、速すみに注進ちゆうしんすべき事、その他の嚴命げんめい任々じんじんに

(第二十六回)

姑摩姫が一休に捕まった後の展開は、次の四点にまとめられる。

- ① 一休法師は姑摩姫を赦すよう義持に進言する。
- ② 満家は、姑摩姫をなかなか帰そうとしない。
- ③ 姑摩姫の赦免を「虎を放ちて山へ還す」ようなもの、と諭える。
- ④ 姑摩姫は、北朝に従う叔父の楠正直に監視されることになる。

姑摩姫が義持暗殺を図って失敗し、法師のとりなしで赦免される流れは、実録「明智光秀養女盛姫之伝」に拠る。<sup>⑦</sup>徳田武「後南朝悲話——庭鐘・馬琴・逍遙——」(『日本近世小説と中国小説』、青堂書店、一九八七年五月)はその指摘をふまえ、「盛姫之伝」の梗

「盛姫之伝」	「俠客伝」
<p>A 盛姫と源大夫は上洛し、豊臣秀吉の暗殺を謀るが失敗し、捕まる。</p> <p>B 秀吉は有光上人の赦免の説を容れ盛姫を赦し、逆に金二千両を与える。秀吉が盛姫に金を与えたのは、このことを聞いた盗賊が盛姫を襲い、姫を殺害することを期待してのことであった。</p>	<p>A 姑摩姫は足利義持の暗殺を図るが、一休法師に看破されて捕まる。(第二十四回)</p> <p>B 一休は義持に姑摩姫に対して寛仁の沙汰を請い、姑摩姫は赦され八九の莊院で暮らす。その際、畠山満家は姑摩姫に金千両を与えて、姑摩姫を盗賊に殺害させることを献策する。(第二十六回)</p>
<p>C 根岸弥五郎なる盗賊とその部下が盛姫宅を襲う。姫は盗賊の部下三人を討ち取り、弥五郎を自分の部下にする。この時盗賊の一人が盛姫の所持していた諸大名の書状と謀叛一味の連判状を盗み、浅野長政を介して秀吉に差し出す。</p> <p>D 秀吉は近臣の河瀬七良左衛門を刺客として盛姫に差し向ける。しかし、姫の威圧に負け帰ってくる。</p>	<p>C 五十稲電次隆光なる盗賊及び部下と荷二郎が、姑摩姫宅に押し入る。姑摩姫は盗賊を撃退するが、その隙に荷二郎が姑摩姫の持つ菊水の御旗、南帝の勅書などを盗む。遊佐就盛を介して足利義持に報告する。(第三十三、三十四回)</p> <p>D 満家は刺客豪袁を姑摩姫の元に送り、姑摩姫の謀叛の証拠を掴もうとする。しかし姑摩姫に看破され追い返される。(第三十七回)</p>

【表1】『俠客伝』『盛姫之伝』対照表

概と『俠客伝』とを比較し、両者の関連の詳細を明らかにする。

しかし、徳田論文の「盛姫之伝」はあくまで梗概であるため、稿者も静嘉堂文庫所蔵の写本『龍溪翁故事談』所収「明智光秀養女盛姫之伝」を見し、徳田論文を参考にしつつ『俠客伝』と「盛姫之伝」の対照を示す【表1】を作成した。女傑の権力者暗殺失敗、法師の赦免進言や大金を与えることでその金を狙った盗賊に命を奪わせる奸計など、大筋は「盛姫之伝」に拠ることが確認できる。

ところが、『俠客伝』の姑摩姫を監視するに至る経緯は「盛姫之伝」に見出せない。つまり、姑摩姫を監視するくだりの基を指摘しなければならぬわけだが、殷周説話がその典拠となる。

『封神演義』第十一回「姜里城囚西伯侯」、紂王は自分を諫言した姫昌を死刑と決める。だが、姫昌は徳ある人物として名高い。比干や黄飛虎などの殷の忠臣は、姫昌の赦免を紂王に請う。

- ① 有亞相比干具奏。收二臣之尸。放姫昌歸國。天子准奏。比干領旨出朝。傍有費仲諫曰。姫昌外若忠誠。内懷奸詐。以利口而惑衆臣。面是心非。終非良善。恐放姫昌歸國。反構東魯姜文煥。南都鄂順興兵。擾亂天下。軍有持戈之苦。將有披甲之艱。百姓驚慌。都城擾攘。誠所謂縱龍入海。放虎歸山。必生後悔。……
- ② 王曰。昌數果應。赦其死罪。不赦歸國。暫居姜里。待後國事安寧。方許歸國。

『通俗武王軍談』巻之一「西伯侯陥一囚姜里城」も以下に示す。

群臣諫て、姫昌素より徳政ありて西方の諸侯を服す。大王今ミコト詔ミコトして朝に入、一旦にこれを殺し玉は、西土の軍民かならず愛を生ぜん。庶幾くは大王の寛恩、一命を赦し給へ……  
姫昌再拜して朝を出。群臣みな退く。崇侯虎、費仲奏して曰、  
姫昌、善伏羲の数を理て、能未来の事を知れり。況や彼が國大にして、兵強をや。今こゝに来るを殺すして、西に帰ることを赦し給ふこと、何ぞ虎を縱して山に歸し、龍を放て海に入る、に異ならんや。……紂王これに従ひ、次の日詔を降して、西伯を姜里城に囚しむ。

大筋を整理すると、以下の四点にまとめることができる。

- ① 群臣は、姫昌を許して國に歸す旨を進言する。
  - ② 佞臣は、姫昌を歸すことを危険視する。
  - ③ 姫昌を故郷に歸すことを「放虎歸山」と比喩する。
  - ④ 姫昌は姜里に監禁され、自由になれない。
- 『俠客伝』の姑摩姫を監視するまでの筋と共通し、加えて、姑摩姫を自由にする比喩「虎を放ちて山へ還す」という表現も、『封神演義』の「放虎歸山」(虎を山へ歸すと同じこと)と一致する。
- だが、「虎を放ちて山へ還す」は類型表現であって、珍しくはない、と批判されるかもしれない。確かに、例えば通俗軍談『通俗三

国志<sup>⑧</sup>(湖南文山著、元禄二(一六八九)年序)にも類似した表現が存する。巻之九「青梅煮<sup>サヤメニテ</sup>酒論<sup>ウツクシイカク</sup>英雄<sup>イロウ</sup>」、劉備は袁術討伐を口実に曹操の元から離れるが、その際、曹操の臣下程昱<sup>テイシュ</sup>は劉備を放ったことを、「龍を大海に放ち、虎を深山に帰<sup>カヘウ</sup>しむる」と表現する。

言い回しだけ見れば、「俠客伝」と『通俗三国志』とは共通するように見える。だが『通俗三国志』では、劉備は曹操の監視から離れることに成功し、「虎」になつた。逆に姑摩姫と姫昌は「虎」の言い回しによって危険視され、「虎」になれなかつた。同じ表現であつても、展開や境遇の違いで様相は変わる。重要なのは、監視下に置かれるという不遇である。典拠の一つ「盛姫之伝」の盛姫も、殿下に對し害心なしといへども、京近き所に住居せんは恐あり。本国に立帰り、尼法師とも成て、養実父母の菩提をも吊わん。と云て、美濃国土岐郡蓮花寺村に住居せし(二一〇一—二二一ウ)と、秀吉のいる都近くに住むことを憚り、自分で住む場所を決めている。秀吉からすれば、盛姫の監視を解くに等しい。住む場所を決められ、「悄悄<sup>ひそか</sup>地<sup>ち</sup>」に「動静<sup>やうじやう</sup>を覘<sup>うかが</sup>」われる姑摩姫と異なる。すなわち、権力者の怒りを買うこと、赦免されること、佞臣が監視を勧める展開、「虎」の言い回し、これらと全て一致する殷周説話を、『俠客伝』の典拠と認めることができる。

麻生論文は監視される姑摩姫について、「叔父正直の看視の下に、

表面無難な日を送つてゐたのであるが、彼女の存在は足利家に取つて、常に大きな脅威であつた」と述べる。この指摘に稿者が一言付け加えるならば、姑摩姫が足利氏にとって「大きな脅威」であつたように、「姫昌乃仁徳君子」(『封神演義』第十一回)と示される姫昌も、「仁徳」を以て民の尊敬を集め、紂王や佞臣にとつて大きな脅威であつた。崇侯虎と費仲が、「彼が国大にして、兵強<sup>へいづやく</sup>をや」と讒言することからも、姫昌を危険視することがわかる。権力悪にとつて脅威であるために、姑摩姫も姫昌も監視される不遇にあう。

馬琴は、殷周説話における姫昌の不遇を姑摩姫に重ね合わせた。そしてその不遇は、「仁徳」を大義として権力悪に立ち向かう、南朝遺臣姑摩姫を描出するための処置と考えられる。

### 三 『俠客伝』における「真面目」と

#### 『封神演義』『通俗武王軍談』

如上、前稿を含め、南朝遺臣を描いた五つの場面を検証したことで、『俠客伝』の世界や構想、登場人物の造型に『封神演義』『通俗武王軍談』の殷周説話が関わることが分明的になつた。

では、馬琴がこれら殷周説話を、『俠客伝』に用いた意図は何であつたのだろうか。『俠客伝』の執筆・刊行より遅れるが、馬琴は天保一一年八月二一日付殿村篠齋宛書翰<sup>⑨</sup>(路女代筆)に、



『封神演義』ハ如御評之、大舞台に候へども、元来より所有、  
『平妖伝』ハ小芝居ニ候得ども、より所なく、作者之衷衷より  
うみ出し候趣向ニ候へバ、『封神演義』よりはたらき候様ニ寛  
候。『封神演義』ハ先年かい取、暫所感致候得ども、久敷事故、  
具に寛不申候へども、「玉藻前」「三国白狐伝」之本家ニて、是  
も大筆ニあらざるにあらず候。

と記している。馬琴は、中国白話小説の『西遊記』や『平妖伝』に  
及ばないまでも、『封神演義』を「大筆ニあらざるにあらず」と評  
す。この評価が自作に利用した経験からくるのであれば、『俠客伝』  
に用いた箇所を検証することにより、馬琴が『封神演義』のどの要  
素を評価したかを、明らかにすることができるのではないか。

まず第一に、人物造型である。『俠客伝』冒頭に登場する著演の  
様相には、貧しい人に施しを与え、戦死者の鬻腰を集めて供養する  
形象が見え、それが『通俗武王軍談』の「厚く下民を恤」み、「西  
伯枯骨を葬りしより、仁徳普く四方に馳す」という姫昌の行動に  
由来する。姫昌は、「仁徳」を以て民の尊敬を集めた。殷周革命の  
際には、息子の姫発が跡を継いで紂王を討つが、姫昌達の「仁徳」  
は、『封神演義』第九十五回に「周主仁徳著於海内」（周の主君は仁  
義のお方として、天下に知られている）とあるように、周王朝にと  
つての大義であった。これらの要素を著演に重ねることで、その

「仁」性を著演に賦与したのである。また、信夫の「烈女」として  
の性格も同様である。信夫は淫らな権力者によって暴行される直前、  
自ら節を守って投身する「烈女」である。その性格は、『封神演義』  
の「烈婦」賈氏の、楼から飛び降りる行動に依拠することで受け継  
ぐ。これらの例が示すように、馬琴は典拠となった人物の行為を踏  
襲することにより、『俠客伝』の登場人物の性格を抽出している。

第二に、信夫や姑摩姫に見られる、善玉の不遇や苦難があげられ  
る。これも前稿に述べたが、信夫が高楼に監禁される大筋は『好速  
伝』に拠るが、無理矢理犯されそうになり投身する様相は『封神演  
義』に依拠する。『好速伝』の監禁譚に加え『封神演義』の投身譚  
を取り入れることで、権力悪から与えられる苦難がより強みを帯び  
る。姑摩姫の監視も、日々「千里鏡」で覗かれる生活を送る点で、  
姑摩姫にとつて苦難である。その監視に付随して、畠山持永のよ  
うな権力悪に眷恋され、結婚を迫られることにもなる。徳田武は  
「史上不遇な人物に寄せる同情」の意である「判官虫貞」の語を使  
い、「不遇の英雄の面影を投影させ、読者の為朝に寄せる同情を煽  
ろう」とする馬琴の史伝物読本の方法を『椿説弓張月』（文化四  
二一八〇七―一八八年刊）に即して述べ、また水野稔は、『俠客伝』の  
作風として、「特に『女仙外史』の名分論的発想や忠臣の受難はこ  
の作品の基幹となっている」と記す<sup>①</sup>。この「判官虫貞」の同情を寄

せるための不遇や、『俠客伝』の基幹となる「忠臣の受難」に、馬琴は殷周説話の人物像や様相を利用するわけである。加えて、善玉の苦難や不遇を描くということは、必然的に、悪を描くことになる。後年になるが、馬琴は、『八犬伝』第九輯巻之三十一（天保一一年刊）に、「唐山の故事を思ふに、殷紂が獍暴なる、西伯（周の文王）羸里の囚れ」（第百五十一回）と、姑摩姫譚の基となった「羸里の囚れ」を、紂王の「獍暴」と記す。つまり、姫昌の「故事」を『俠客伝』に用いることで、善玉の不遇だけでなく、権力悪の「獍暴」を北朝方に賦与したといえる。

第三に、構想の伏線を内包する趣向の妙をあげることができる。馬琴は史書『鎌倉大草紙』の、「（貞方を一稿者補）鎌倉の侍所千葉介兼胤が生捕にして、七里浜にて討之」とある歴史の史実を踏まえて、貞方主従を千葉介兼胤と妙算の奸計に嵌めて死刑にまで陥らせるが、『封神演義』の趣向を用いることにより、二人の命を救う虚構に改める。史伝物読本『俠客伝』において、読本の常套パターンである歴史の是正として、史実に登場する貞方の処刑回避は必要不可欠である。その是正の趣向に『封神演義』を用いるということは、馬琴がその趣向を評価したからにはかならない。

そして、右にあげた三つの要素と関わるのが、馬琴の「真面目」である。「真面目」については、馬琴が『八犬伝豊翠君評 九輯中

映<sup>12)</sup>（天保七年成立）の答評に、次のように書く。

拙作の真面目は、趣向の新奇なると文の工緻なるにはあらず。或は悪を瘴み善を彰し、忠臣貞女孝子順孫の事、或は古昔良善の君子の薄命なりし缺陷を補ひ、或は暴虐奸雄の高運なりしを孔聖春秋心誅の筆意に効ふて人心の不平を快くして、以て勸懲の一端としぬるのみ……同じ作り物語には侍れども、俠客伝などは始より作者の真面目多かり。そは春秋心誅の意に倣ふ事、少からねば也。（四三ウー四四オ）

「忠臣」「貞女」や「古昔良善の君子」が「薄命」である史実の「缺陷」を補い、「暴虐奸雄」が「高運」である不平を快くして「勸懲」の一端とする筆致が「真面目」である。さらに馬琴は、「真面目」を『俠客伝』に多く描くと述べる。この「真面目」を、拙稿でとりあげた殷周説話と関連する場面と照らし合わせると、貞方が処刑寸前に「洪波」にのまれるのも、信夫を仙丹で蘇らせるのも、「忠臣」「貞女」の「薄命なりし缺陷」を補う趣向と考えられはしないか。実際、『俠客伝』第十七回に、信夫の投身を聞いた小六が、「已なん（他（信夫一稿者補）が薄命」と嘆く場面があることを見ても、「貞女」の「薄命」を是正した、と読み取ることができる。

拙稿で指摘した、『俠客伝』と関わる殷周説話の場面は、『封神演義』でいえば、第九・十一・十八・二十三・三十一・三十二回であり、

全百回の『封神演義』における前半——紂王や妲己の暴虐、姫昌をはじめとする善玉の不遇といった、周王朝が殷王朝を伐つに至るまでの経緯を描く部分——といえる。馬琴の言を借りると、「忠臣」「貞女」「孝子」「順孫」「古昔良善の君子」の「薄命」、「暴虐奸雄」の「高運」を描いた部分であり、馬琴が「真面目」を著すための重要な形象にほかならない。すなわち、『俠客伝』における「忠臣」「貞女」「孝子」「順孫」は、著演・貞方・信夫・小六・姑摩姫である。また、「暴虐奸雄」の輩を「春秋心誅の筆意に效」い「人心の不平を快く」するには「暴虐」な人物を描く必要があるが、これも紂王や佞臣に由来する北朝の権力悪の様相に表れており、馬琴が主張する「真面目」に、殷周説話の様相が深く関わる。

馬琴は作品において人物を造型する際、拠り所となる人物の選択に苦心した。『俠客伝』第三・四集執筆と同じ天保四年に、建部綾足著『本朝水滸伝』（明和一〇〔一七七三〕年刊）を批評した、『本朝水滸伝を読む并批評』<sup>⑧</sup>を著しており、そこには、

押勝を又宋江に擬したるは宜しからず。それをいかにぞとならば、水滸伝の宋江は、後に忠臣になるをもて、看官おの／＼たのもしく思はぬもなく、白づからに鼯鼠のつくは、理りしかるべき所あり。又押勝は国史に據るに、秦の始皇の母太后の男妾嫪毐、唐の武后の男妾張昌宗等の並流にて、佞倖の小人なれば、その

罪道鏡と百歩五十歩の間にあり。そを忠臣に作りかへて、宋江に擬したりとも、看官の鼯鼠はつきがたき役者也。（一四ウ）と書いている。ここで馬琴は作品内の人物造型において、善悪を対応させないと「看官の鼯鼠」がつきにくいと批判する。

さらに同年執筆の『三遂平妖国字評』<sup>⑨</sup>には、

宋の妖賊王則、明の妖婦唐賽兒の事の迹は、元の羅貫中清の逸田叟、これを稗史に編次して、後世に伝へたり、おもふに逸氏の女仙外史は、永樂天子の不義を憎みて、妖をもて仙として建文帝の為に作れり、その意匠春秋心誅の文法に本づきて、順逆の理をあきらかにし、不義を討て缺陷の恨を雪んとするにあり、しかれども賽兒は明の妖賊也、縦勸懲の筆にあやつりて、これを建文の忠臣に作り更たりといへども、是を實録と照し見るときは快らぬ所あり（四三ウ—四四オ）

と記す。従来、『俠客伝』に影響を与えたとされる『女仙外史』を「順逆の理をあきらかにし」た物語と評価しながらも、『実録』に照らし合わせたとき、主人公の唐賽兒は「妖婦」「妖賊」であるので、「建文の忠臣に作り更」るのは「快らぬ所」があると評す。

善悪に対応させるという観点から見れば、姫昌や姫発は『史記』などの史書においても、暴虐な紂王を伐つた聖人君子として記される。「仁」を大義とした周王朝に属した人物達は、その性質におい

て、南朝遺臣の造型に利用しやすい面があったと思われる。すなわち、馬琴が『封神演義』を「大筆二あらざるにあらず」とした理由は、「真面目」に関わる人物造型や「孔聖春秋心誅の筆意に效」い「人心の不平を快く」する世界を『俠客伝』に描出する際に、参考になり得たためであった。殷周説話は「真面目」を多く描く『俠客伝』に、欠くことのできなかつた粉本といえよう。

### まとめ

以上の検証によって、馬琴が「得意の作」とした『俠客伝』の世界や構想、人物造型、そして「真面目」に関して、『封神演義』『通俗武王軍談』からの影響を看過することはできない。従来、等閑視されてきた殷周説話の『俠客伝』への影響は多く、かつ深い。

馬琴は、彼の求めた「真面目」に即す『封神演義』『通俗武王軍談』の世界を『俠客伝』に重ねた。そうすることで、南朝遺臣の「仁徳」や不遇を描出し、その不遇に抗う「身を殺して仁を成」す『俠客』達が活躍する『俠客伝』を形成したのではないか。

### 注

- ① 新日本古典文学大系87『開卷驚奇俠客伝』（岩波書店）に拠る。  
② 麻生磯次「馬琴の読本に及せる中国文学の影響」（『江戸文学と中国文

学』三省堂、一九四六年五月）が「女仙外史」の影響を指摘。徳田武「馬琴の稗史七法則と毛声山の「読三国志法」（『日本近世小説と中国小説』青裳堂書店、一九八七年五月）が「三国演義」と『説史余論』からの影響を述べ、大高洋司「開卷驚奇俠客伝」の骨格」（注①所収）も、『説史余論』との関係を重視する。

- ③ 馬琴が通俗本『通俗大明女仙伝』ではなく「女仙外史」の原典を閲していたことは、濱田啓介「勸善懲惡」補紙（『近世小説・宮為と様式』に関する私見、京都大学学術出版会、一九九三年二月）が確定する。しかし、内容自体は変わらないこと、理解のしやすさを勘案し、「通俗大明女仙伝」を引用する。『通俗大明女仙伝』は、中村幸彦編『通俗大明女仙伝』（汲古書院、一九八五年一月）に拠る。適宜、旧字体を新字体に、濁点・句読点などを改めた。資料引用の際に施した処置は、他の資料においても同様である。

- ④ 国立国会図書館所蔵の清版「新刻鍾伯敬先生批評封神演義」に拠る。濱田啓介改題『馬琴評答集』（八木書店、一九七三年三月）に拠る。

- ⑤ 徳田武編『新鐫陳眉公先生批評春秋列国志伝』（ゆまに書房、一九八三年九月）に拠る。

- ⑦ 『俠客伝京師淀新評』に、「娼摩姫の行状、光秀の女に似て換骨也、とある評も、知音の評にいはずして、この人獨よく見たり」とあり、淀屋新太郎が「盛姫之伝」と『俠客伝』との関連に言及する。『俠客伝京師淀新評』は、柴田光彦編『馬琴評答集』第五卷（早稲田大学蔵資料影印叢書刊行委員会、一九九一年九月）に拠る。

- ⑧ 徳田武編「李卓吾先生批評三国志」全六巻（ゆまに書房、一九八四年一月）に拠る。

- ⑨ 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』（八木書店）に拠る。  
⑩ 徳田武「読本論」（中村幸彦・水野稔編『秋成・馬琴』、角川書店、一

九七七年二月)。

⑪ 日本古典文学大辞典編集委員会「日本古典文学大辞典」(岩波書店、一九八三年一〇月)、「開卷驚奇俠客伝」の項に拠る。

⑫ 柴田光彦編集「馬琴評答集」第三卷(早稲田大学蔵資料影印叢書刊行委員会、一九九〇年三月)に拠る。

⑬ 早稲田大学図書館蔵(古典籍総合データベース)・曲亭馬琴撰「本朝水滸伝を読む并批評」(天保四年成立、饗庭篁村蔵本を坪内逍遙が写したものをさらに春城学人が写したもの)に拠る。

⑭ 注⑤に同じ。

(付記) 静嘉堂文庫には貴重な資料の閲覧を許可して頂いた。記して感謝

致します。